

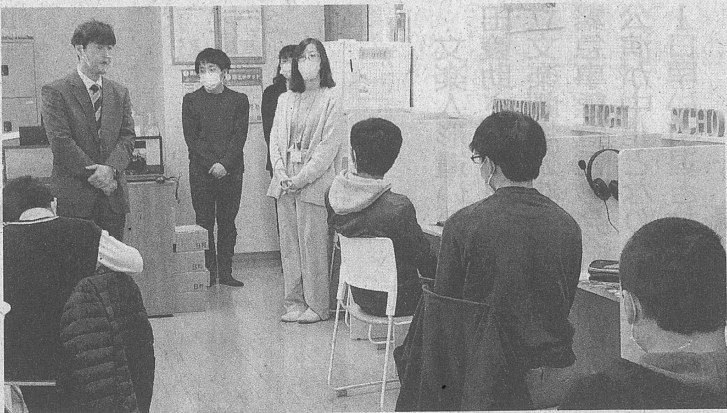
子の気持ち 寄り添って

十人十色

②

子どもたちの今

新年度の学校生活が始まりました。小学校の新1年生は、主体が遊びから勉強へと変わり、時間割に沿った行動が求められます。中学校の新1年生は、ク



アットスクールが運営する通信制高校のサポート校「アットスクール高等学院」でも新年度の学習が始まった(草津市で)

学校に行く勇気と休む勇気

ラス担任制から教科担任制に変わり、部活動も始まって、友達関係も複雑になっていきます。

新たな学校社会に適応することは、大人が思う以上に大変なことです。大人は「学校に行く」「教室で授業を受ける」ということを当たり前のことと思い、子どもの登校や勉強に対する努力を認める一方で、「学校を休む」決断は認めない傾向があります。しかし、その決断には「行く」「休む」以上に勇気が必要です。

文部科学省の調査では2019年度、不登校により小中学校を30日以上欠席した児童生徒は18万1272人で、過去最多を更新しました。全体の児童生徒に占める割合は、小学校で0.8%、中学校で3.9%。この結果を子どもが、学校に行きたくない結果と捉えるか、「学校に行きたいけど行けない」結果とするかでは、数の持つ意味は全く違ってきます。

集団が苦手な子もいれば、雑音が気になって集中できない子もいます。見通しの持ちにくい活動に不安を感じる子もい

ば、手先が不器用で書くことが苦手な子もいます。

学校に「行かないといけない」と思っても行けない子もいて、その理由や原因は様々です。その行為を「問題行動」と判断してはいけません。

必ずしも教室で全ての授業を受けなくても大丈夫。▽学校を休む日も、起きたら着替えて朝食はんを食べる▽体調が悪くなければ2日続けては休まない▽教室に入れない時は、別室で自習してもOK——といったように、子どもの気持ちに寄り添い、今できることを一緒に考えていくことが大切ではないでしょうか。

不登校の子どもが悪い、家庭のしつけが悪いといった根強い偏見を取り除き、学校と家庭、社会が子どもに寄り添い、共感的理解と受容の姿勢を持つことが、子どもの自己肯定感を高めるためには重要です。

周囲の大人との信頼関係を築く過程が社会性や人間性を伸ばし、結果として子どもの社会的自立につながっていく。そうしたことが期待されているのです。

(発達支援教室アットスクール代表 鈴木正樹)